

大見遺跡発掘調査報告

2009（平成21）年 1月

三重県埋蔵文化財センター

卷頭写真



空中写真（南から）



赤色顔料付着埴輪片

序

本書で報告する大見遺跡は、松阪市佐久米町に所在します。県有数の河川である櫛田川や金剛川、真盛川の下流域に位置しています。広がる平野は人々の生活の場として長らく利用され、弥生時代以降の遺跡が多数存在しています。これらの遺跡は、我々の祖先が辿った長い歴史のほんの1コマを表しているに過ぎないかもしれません。しかし、この1コマの積み重ねが歴史であり、どれ1つ欠くことのできない、かけがえの無い歴史遺産と言えます。

今回報告するのは、松阪市に所在する大見遺跡の発掘調査の記録です。本書が、郷土に残された貴重な歴史遺産を未来に伝える一助となれば幸いと存じます。なお、末筆ながら、現地調査や報告書作成に際し、ひとかたならぬご理解とご協力をいただいた多くの関係者の方々に心から深謝し、厚くお礼申し上げます。

2009（平成21年）1月

三重県埋蔵文化財センター
所長 吉水康夫

例　　言

1 本書は、三重県松阪市佐久米町大見に所在する大見（おおみ）遺跡の発掘調査報告書である。

2 本書が扱う発掘調査の原因事業は、平成20年度湛水防除事業西黒部地区である。

3 調査は下記の体制で実施した。

　　調査主体 三重県教育委員会

　　調査担当 三重県埋蔵文化財センター

　　調査研究 I 課 小濱 学 木本 勝己

　　作業委託 株式会社文化財サービス

　　調査面積 633 m²

　　現地調査期間 平成20年6月2日～平成20年8月4日

4 調査にかかる諸費用は、三重県農水商工部が負担による。

5 本書が扱う発掘調査の資料並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

6 本書の執筆・編集は小濱 学が行った。遺構の写真撮影は小濱が、遺物の写真撮影は、酒井巳紀子が行った。

7 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、松阪市都市計画図、三重県農水商工部作成の事業計画図である。

8 本書で示す方位は、座標北を用いた。座標は世界測地系を用いた。

9 本書では、下記の遺構表示略記号を用いた。

　　SD：溝 Pit：柱穴・小穴

10 本書で使用する用語は、以下に統一している。

　　つぼ：壺 わん：椀 なべ：鍋

11 本書で表記する色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』(21版、日本色研事業株式会社、1998年)に準拠した。

12 挿図と写真図版の遺物番号は相互に対応している。なお、遺物の写真図版は縮尺不同である。

13 発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の方々にご指導・ご協力をいただいた（敬称略・五十音順）。

　　木野本和之

本文目次

I	前　　言	(小瀆　学)	1
II	位置と環境	(小瀆　学)	4
III	遺　　構	(小瀆　学)	6
IV	遺　　物	(小瀆　学)	11
V	小　　結	(小瀆　学)	12

挿図目次

第1図 遺跡周辺図及び調査区位置図	2
第2図 4mグリッド設定図	3
第3図 遺跡位置図	5
第4図 土層断面図	7
第5図 遺構平面図1	8

第6図 遺構平面図2	9
第7図 SD1平面図・断面図	10
第8図 SD2平面図・断面図	11
第9図 出土遺物実測図	12

写真図版目次

卷頭写真 空中写真	
赤色顔料付着埴輪片	
写真図版1 米軍撮影の航空写真	14
写真図版2 調査前風景	15
調査前風景	15
写真図版3 調査区遠景	16
調査区全景	16
写真図版4 調査区全景	17
調査区全景	17
写真図版5 調査区南側	18
調査区北側	18

写真図版6 SD1	19
SD1	19
写真図版7 SD2	20
SD2	20
写真図版8 土層の状況	21
調査風景	21
写真図版9 調査風景	22
発掘調査地の現状	22
写真図版10 出土遺物1	23
写真図版11 出土遺物2	24

I 前 言

1 調査に至る経過

大見遺跡の発見の契機は、県農水商工部により松阪市佐久米町地内に湛水防除事業西黒部地区が計画され、平成19年度に行われた事業地内の分布調査による。現況としては、畑地あるいは水田に、遺物の散布を確認できたからである。また、平成19年度に、範囲確認調査を実施した結果、遺物の出土が確認できたため本調査の対象となった。

2 調査の経過

(1)調査経過の概要

範囲確認調査（平成19年度）

丸山古墳の西側約20～100m付近で、真盛川の氾濫原で現況は水田及び畑地である。9箇所の範囲確認調査坑を設定した。No.5の調査坑において、地表下25～60cmで埴輪、土師器片が、No.7の調査坑において、埴輪と土師器片を確認することができた。

本調査（平成20年度）

現地調査は、6月4日から開始した。発掘調査区の隣接地が河川であることも影響し、湧水量が多く調査の進捗に支障をきたすほどであった。そのため、24時間排水を実施し、湧水対策とした。遺構としては、2条の中世溝を確認した。遺物については、古墳時代の形象埴輪と円筒埴輪の出土を確認することができた。開始時期が梅雨入りと重なったため、天候不順や湧水により、調査は難渋したが、7月11日には現地調査を終了した。

(2)調査日誌(抄)

2008（平成20）年6月4日（水）

調査現地の確認を行う。

2008（平成20）年6月10日（火）

佐久米町自治会長との打ち合わせを行う。

2008（平成20）年6月11日（水）

機材及び資材を搬入する。

2008（平成20）年6月13日（金）

用地境の確認を行う。

発掘調査区を設定する。

調査前の全景写真を2カ所撮影する

2008（平成20）年6月17日（火）

調査区端や用水路の養生を行う。

表土掘削の開始。

現況地盤から55～60cmの部分で、溝SD1を確認する。遺物は全体的に少ない。湧水が多い。

2008（平成20）年6月18日（水）

排水作業。

表土掘削続行。

No.0+70m～94m付近は遺物がやや多く出土。

2008（平成20）年6月23日（月）

排水作業が當時可能になる。

表土掘削（重機）。

写真撮影（上流側）。

起伏のある地形に土の堆積がみられる。安定していない感をうける。

2008（平成20）年6月25日（水）

排水作業。

表土掘削（重機）。

検出（下流側）溝検出。

写真撮影（下流側）。

2008（平成20）年6月26日（木）

排水作業。

人力掘削（下層確認トレンチ 上流側）。

写真撮影（土層）。

実測用3メートル地区設定。

遺構実測。

トレンチで砂礫を確認。遺構は確認できなかった。

2008（平成20）年6月27日（金）

排水作業。

人力掘削（下層確認トレンチ 下流側）。

遺構実測。

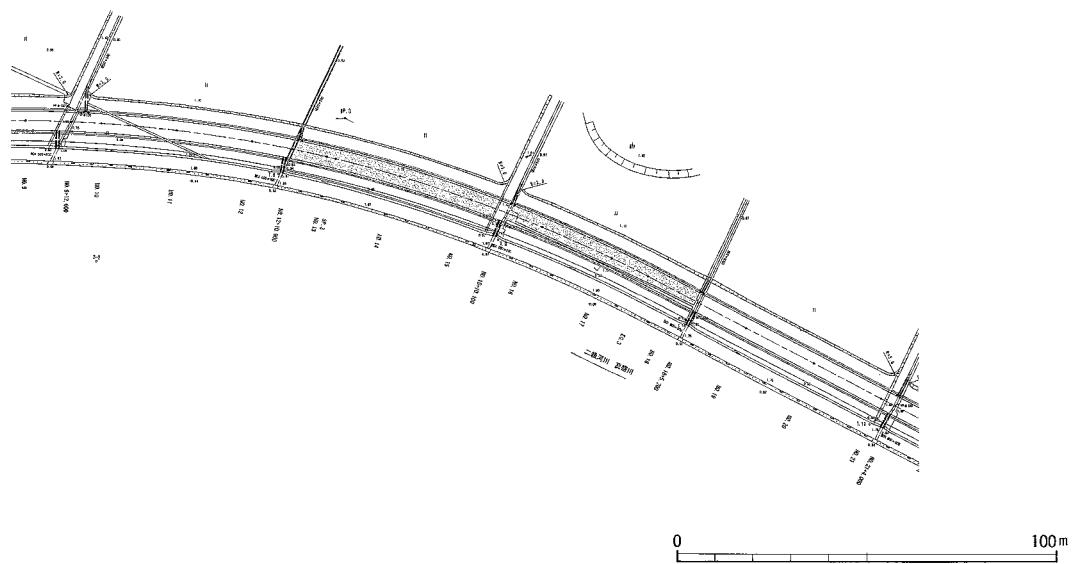
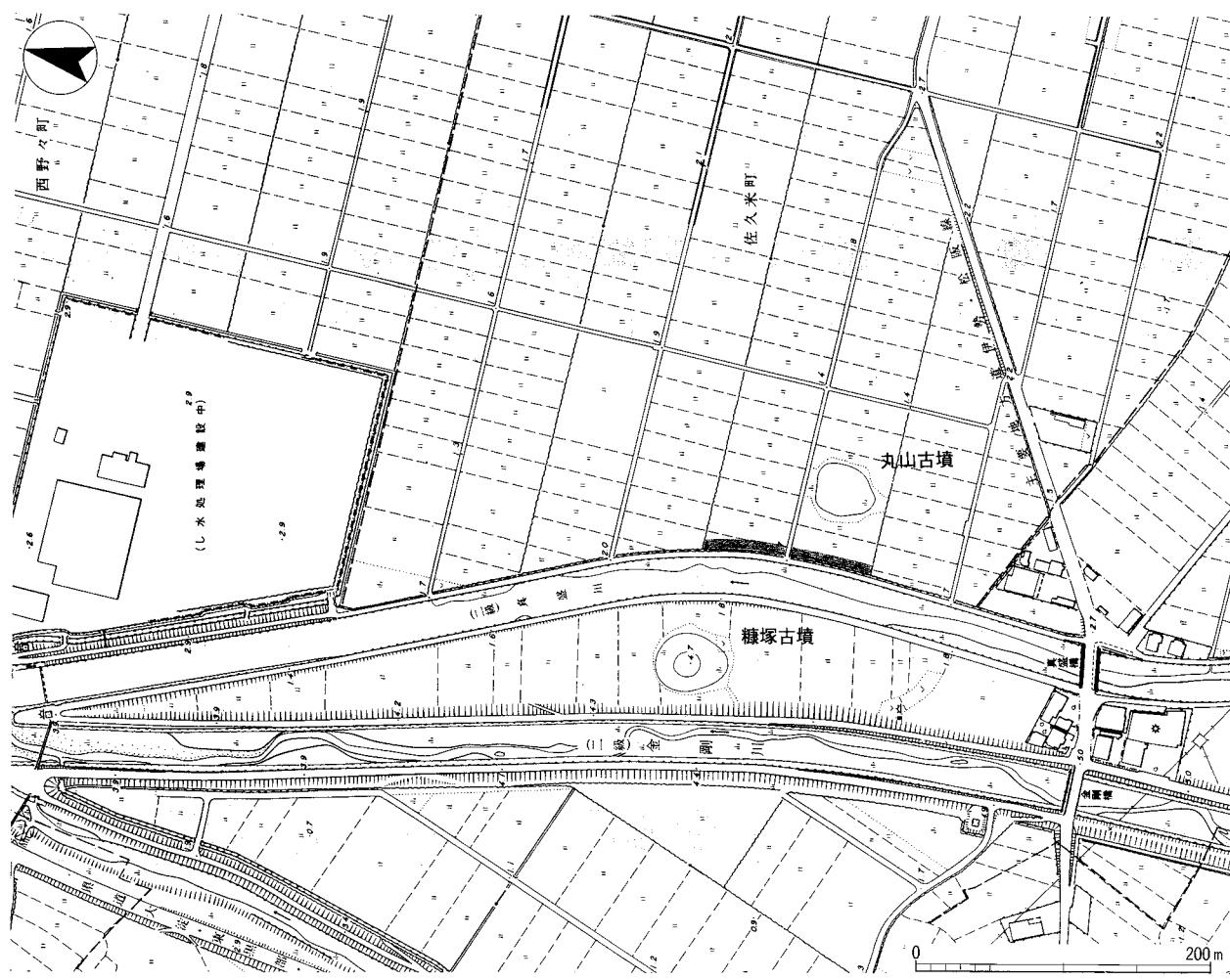
土層断面実測。

G P S測量（国土座標の設置）。

下層確認で、起伏のある砂礫上に土が堆積している様相を確認。

2008（平成20）年7月2日（水）

排水作業。



第1図 遺跡周辺図及び調査区位置図 (1:5,000、1:2,000)

空中写真撮影の準備。
4 m地区杭撤去。

2008（平成20）年7月3日（木）
排水作業。
空中写真撮影。

2008（平成20）年7月7日（月）
排水作業。
埋め戻し（下流側から）。

2008（平成20）年7月8日（火）
排水作業。
埋め戻し。

2008（平成20）年7月9日（水）
排水作業。
埋め戻し（上流側に入る）。

2008（平成20）年7月10日（木）
排水作業。
埋め戻し、終了。
仮設工の撤去。

2008（平成20）年7月11日（金）
仮設工の撤去。
調査現地の引渡し。
佐久米自治会長に終了の挨拶。

（3）文化財保護法等による諸通知

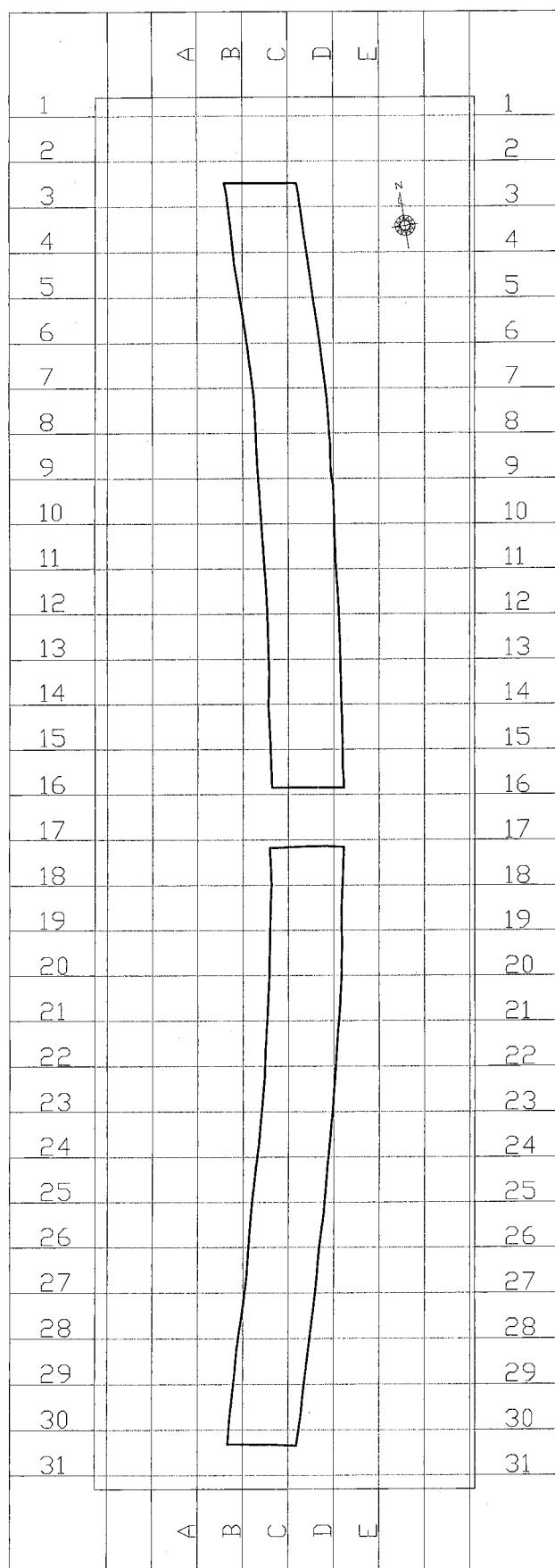
文化財保護法等にかかる諸通知は、以下によって行っている。

- ・三重県文化財保護条例第48条第1項にかかる発掘通知（県教育長宛県知事通知）
平成20年4月24日付松農環第153号
- ・文化財保護法第99条第1項にかかる発掘調査実施報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）
平成20年6月3日付教理第101号
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長宛県教育長通知）
平成15年2月3日付教委第12-4407号

3 調査の方法

（1）発掘調査区の設定について

発掘調査区は、事業柵に沿うように設定した。概ね調査区長辺に沿った任意の基準を設定し、4 mのグリッドを設置した。なお、この4 mグリッドは国土座標の方向とは合致していない。4 mグリッドに



第2図 4mグリッド設定図 (1:600)

は、北～南に算用数字、西～東にアルファベットを付与し、各地区の北西杭を当該地区名とした。

(2)遺構番号について

通し番号で番号を付与している。なお、Pitについては、4mグリッド毎の通し番号とした。

(3)掘削の方法

掘削は、基本的に耕作土及び床土を重機で行い、包含層及び遺構を人力で行ったが、包含層掘削の一部は重機で行った。

(4)遺構図面の作成について

遺構図面の作成は、すべて手書きによる。各図の作成時の縮尺は以下の通りである。

- ・平面図（全図）…1：50
- ・土層断面図…1：20

(5)遺構及び遺物写真について

調査区の全景写真は、調査前はローリングタワーを設置して撮影し、調査後についてはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。個別の遺構写真等は、三脚を利用して撮影した。フィルムは、4×5cm版（モノクロ・カラー・ポジ）に加え、35mm版（モノクロ・カラー・ポジ）を使用した。カメラは、WISTA 4×5、NIKON FM2を使用した。なお、報告書掲載の遺物写真については、フィルムは、4×5cm版（モノクロ・カラー・ポジ）に加え、6×9版（モノクロ・カラー・ポジ）を使用した。カメラは、WISTA 4×5を使用した。

（小瀬 学）

II 位置と環境

松阪市は、南北に細長い三重県のほぼ中央に位置し、合併により三重県を横断する形で奈良県に達する。北は伊勢湾及び津市、南は多気郡多気町、東は多気郡明和町、西は奈良県に接している。市内には複数の河川が流入しているが、そのなかでも櫛田川は最大規模を誇っている。櫛田川は、紀伊山地に源を発し中央構造線に沿って東流するが、松阪市南部の丘陵地帯から平野に出るあたりで北方に向きを変え、伊勢湾に注ぐ総延長約84kmの三重県を代表する河川である。この屈曲点から分流し、本流の東側を北流する祓川が本来の河道とされるが、乱流を繰り返し、11世紀後半の大洪水により現流路に移行したものと考えられている。この乱流の結果、松阪市東部には大見遺跡（1）も立地する広大な沖積平野が形成された。この沖積平野は櫛田川低地と呼ばれており、櫛田川、祓川などによってつくられた氾濫平野とその前面の三角州と海岸平野及び干拓地を含んだ地域を指す。氾濫平野については砂質土壤からなる扇状地性の平野、三角州についてはシルト・粘土からなり低湿、海岸平野については砂堆と一般面からなること、干拓地については強グライ質の細砂からなり低湿であるという特徴がそれぞれみられるということである。櫛田川低地を含む沖積平野及び周辺の丘陵部分には、多くの遺跡が存在する。ここで

は、大見遺跡が存続した時期である古墳時代以降と時期は遡るが弥生時代も含めて概観したいと思う。

沖積平野を望む周辺の低位丘陵には、弥生から古墳時代にかけての有力な遺跡が存在する。草山遺跡

（2）は発掘調査の結果、竪穴住居や方形周溝墓が多数検出され^①、弥生時代後期の大集落であることが判明した。杉垣外遺跡（3）や村竹コノ遺跡（11）は弥生時代後期の環濠の存在が認められる。また、同じ弥生時代後期で出土遺物から杉垣外遺跡、堀町遺跡よりは若干新しい時期と考えられる阿形遺跡も環濠が認められた遺跡である。また、大見遺跡から南東へ約2.7kmには、前方後方型周溝墓を多数確認した瀬干遺跡（4）があり、拠点集落の存在を窺わせる。古地図により直径55mの周溝を伴う円墳であったことがわかる清生茶臼山古墳（6）、それと同様な規模で残存する久保古墳（5）は、4世紀後半頃の築造と考えられる大型墳である。前者からは内向花文鏡、後者から三角縁神獣鏡のいずれも舶載鏡の出土が伝えられている^②。5世紀代の築造では、伊勢国最大の前方後円墳である宝塚1号墳（7）、帆立貝式前方後円墳の2号墳（8）があり、強大な権力者の存在を示している。遺跡は沖積平野にも広がり、弥生時代中期の涌早崎遺跡（9）、後期の堀町遺跡（10）の両者からは、発掘調査において銅鐸形土製品の出



第3図 遺跡位置図 (1:50,000) ※国土地理院1:25,000 松阪・松阪港

土が確認されている^③。銅鐸を模倣した遺物としては、前述した草山遺跡からも銅鐸形銅製品が出土している^④。西山遺跡では、古墳時代後期の竪穴住居が検出され^⑤、大見遺跡に近接する全長45m程度の前方後円墳に推定される大塚山古墳を中心とする佐久米古墳群（12～14）は、出土遺物から5世紀後半に築造されたものと考えられる^⑥。このように、河川の氾濫が相続いだと思われる沖積平野にも、弥生時代以降人々は拠点を構えていたようである。山ノ花遺跡（15）、御堂山遺跡（16）、廿チ遺跡（17）、北上遺跡（18）は、いずれも沖積平野に、中野前遺跡（19）は低位丘陵から綾やかに傾斜する扇状地の先端部に位置している。これらの遺跡の周囲は、「和名抄」に記載のある飯野郡黒部郷、長田郷、神戸郷に比定されている。古代官道は、現在の駅部田町から早馬瀬町へまっすぐ伸びていたと推定されており^⑦、両町の名は、それに関連するものと考えられる。都と斎宮・伊勢神宮、あるいは志摩方面を結ぶ交通路で、斎王群行等、盛んな往来があったものと思われる。伊勢神宮の勢力は、中世にはいっても無視できず、西黒部町には黒部御厨が設置された。しかし、北畠氏が徐々に支配を強化し戦国大名化するにつれて、神宮の力は後

退する。西黒部町周辺は、中世後期には北畠氏の支配下にあり、塩業を行っていたことが古文書に記されている^⑧。そしてそれを裏付けるかのように、同町の池ノ上遺跡（20）、小狐遺跡（21）からは、周囲に粘土を貼りつけたかん水槽をはじめとする製塩遺構が検出されている^⑨。その北畠氏も織田氏に支配され、蒲生氏郷により松阪城（23）やそれに伴う城下町（24）が建設され、三井家をはじめとする松坂商人が活躍することになる。そしてこの伝統は現在に受け継がれ、松阪市は人口10万人を超える南伊勢の中心都市として繁栄している。

（小演 学）

[註]

- ①松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報』（1982～1985年）。
- ②西山克・久松倫生・下村登良男「松阪市」（『日本歴史地名大系別三重の地名』、1983年）。
- ③松阪市教育委員会『涌早崎遺跡発掘調査報告』（1992年）。
- ④①に同じ。
- ⑤三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報4』（1993年）。
- ⑥②に同じ。
- ⑦足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」（『探訪古代の道』第1巻、1988年）。
- ⑧②に同じ。
- ⑨⑤に同じ。

III 遺構

1 基本層序

上から表土（耕作土）、灰色粘質砂礫混土（5Y4/1）、灰色粘質土（10Y4/1）、オリーブ灰色砂質礫混土（2.5GY6/1）等が存在し、オリーブ灰色砂質土（5GY6/1）及び暗オリーブ灰色砂礫（5G4/1）で、遺構を検出することができた。遺物については、耕作土以下で疎らに出土した。また、調査区西側に下層確認を行ったが、遺構の遺存や遺物の存在を確認はできなかった。今回の調査区は、後世の河川による氾濫等により地形変更の影響があったと思われる。そのような不安定な場所ではなく、安定している地形を選んで古墳が築造されたことが窺えるのではないか。

2 遺構

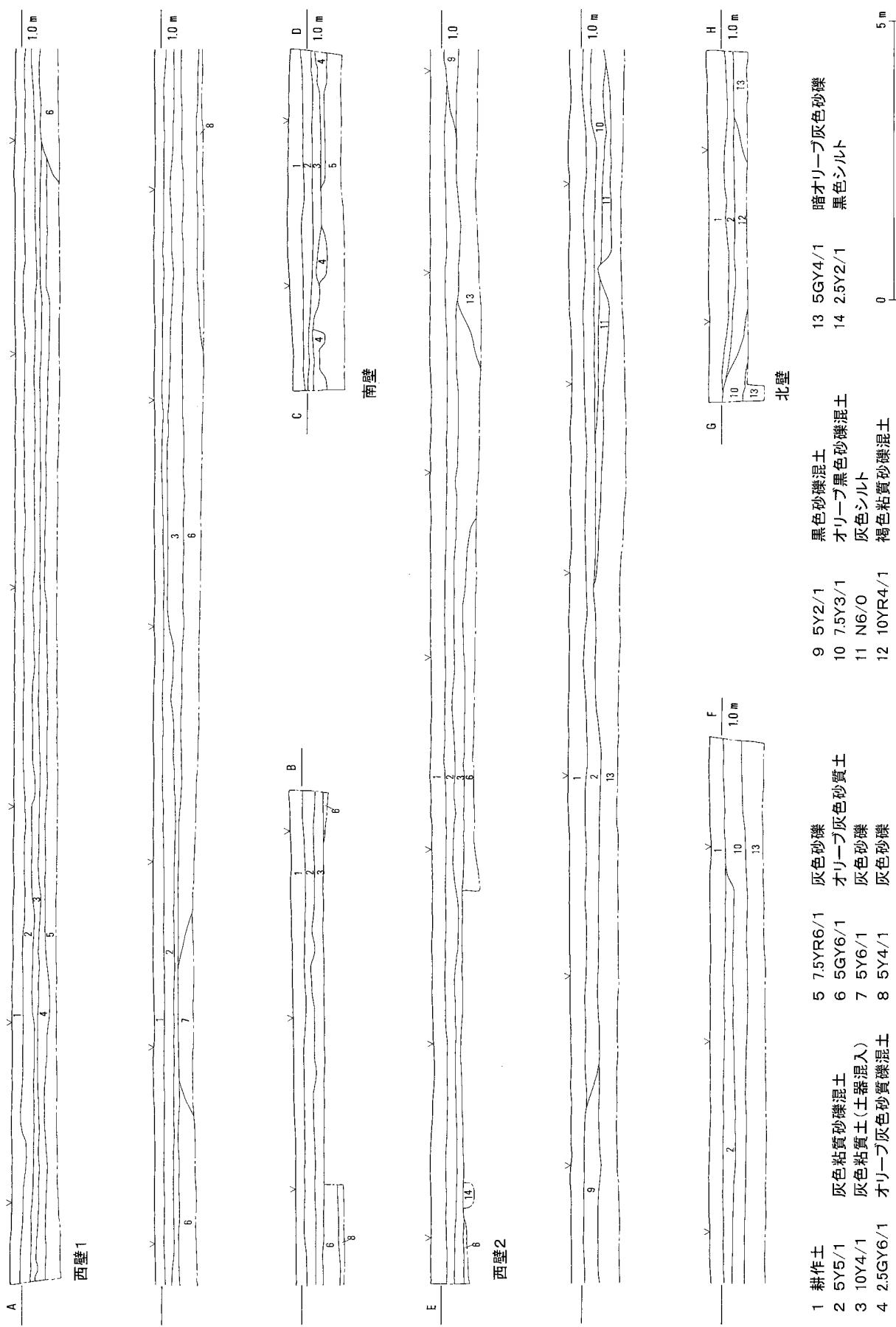
今回の発掘調査区内では、溝2条を確認することができた。

S D 1

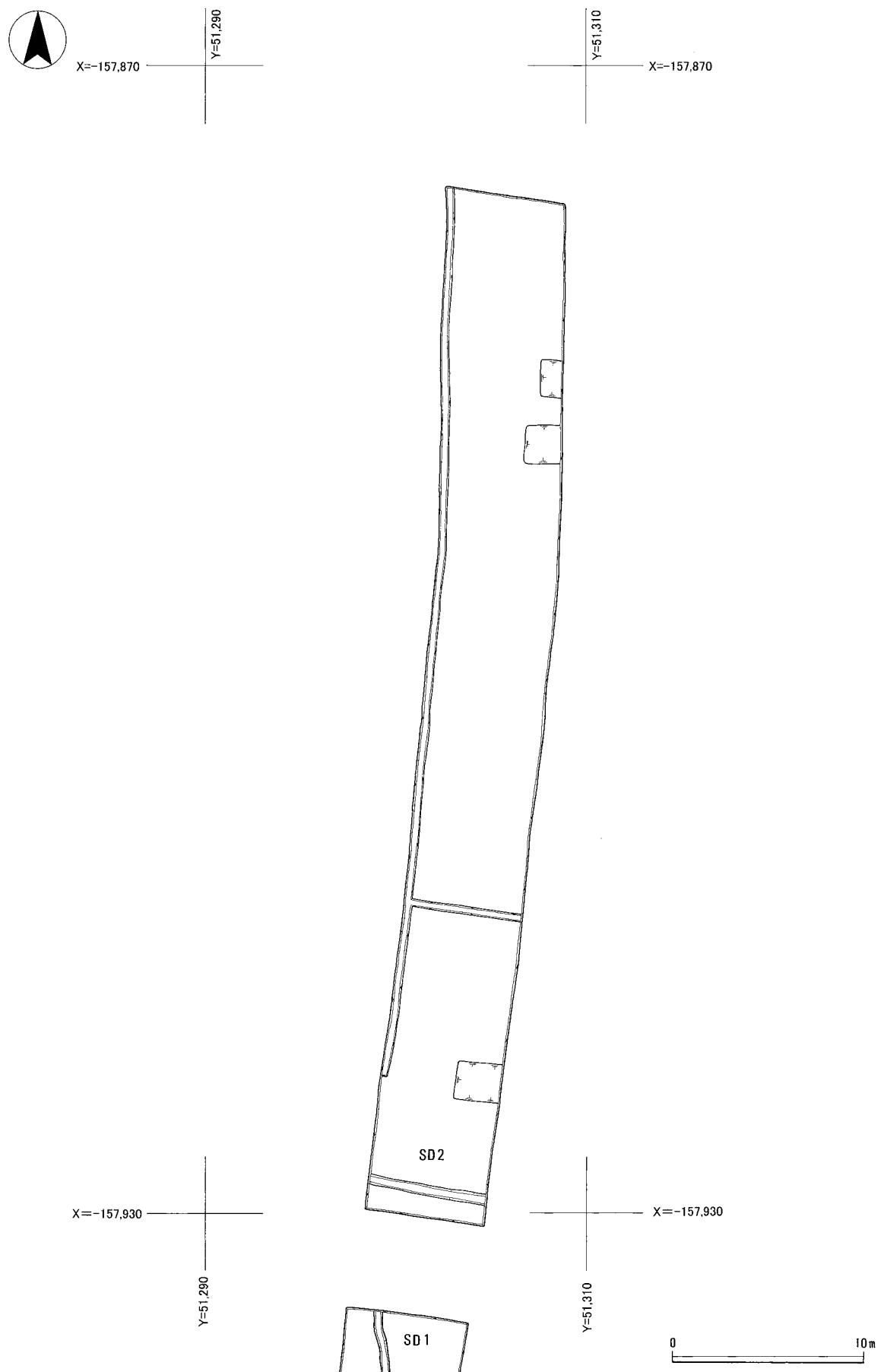
規模は幅38～46cm、深さ4～10cm。発掘調査区内だけの状況ではあるが、N19.5°Eの振りがみられる。発掘調査区外に伸びていくようである。但し、農道を挟んだ未掘削部分で曲がるかあるいは消失するのか、北側の発掘調査区にはこの溝を確認することはできなかった。遺構埋土は、黒褐色シルトの1層で、その埋土からは土師器片の出土が若干確認できた。小片であるため時期の判断は難しいが概ね中世以降のものと思われる。何らかの区画がなされていたのであろうか。

S D 2

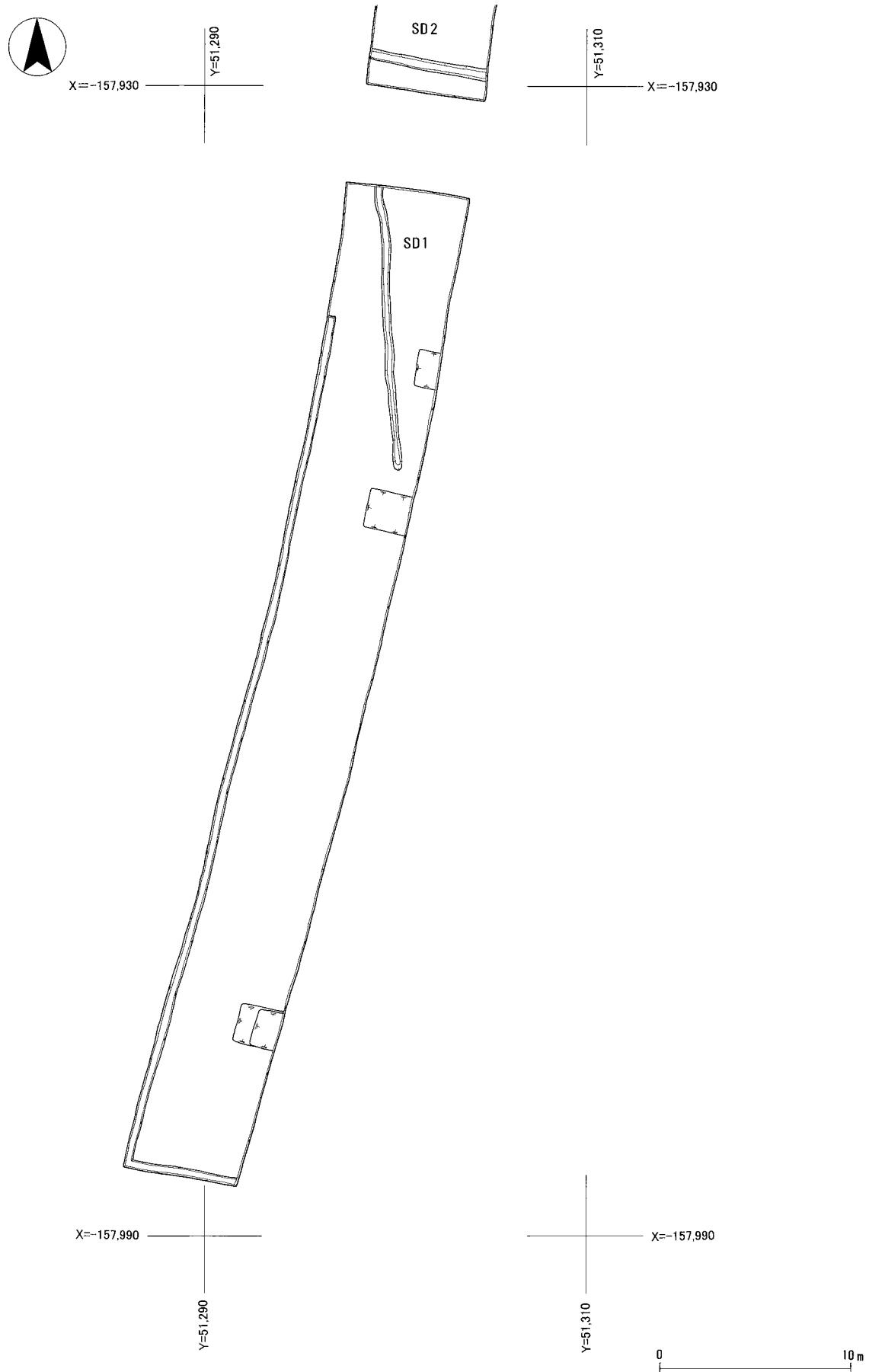
規模は幅49～65cm、深さ13～25cm。発掘調査区内だけの状況ではあるが、E9.5°Sの振りがみられる。



第4図 土層断面図 (1:100)



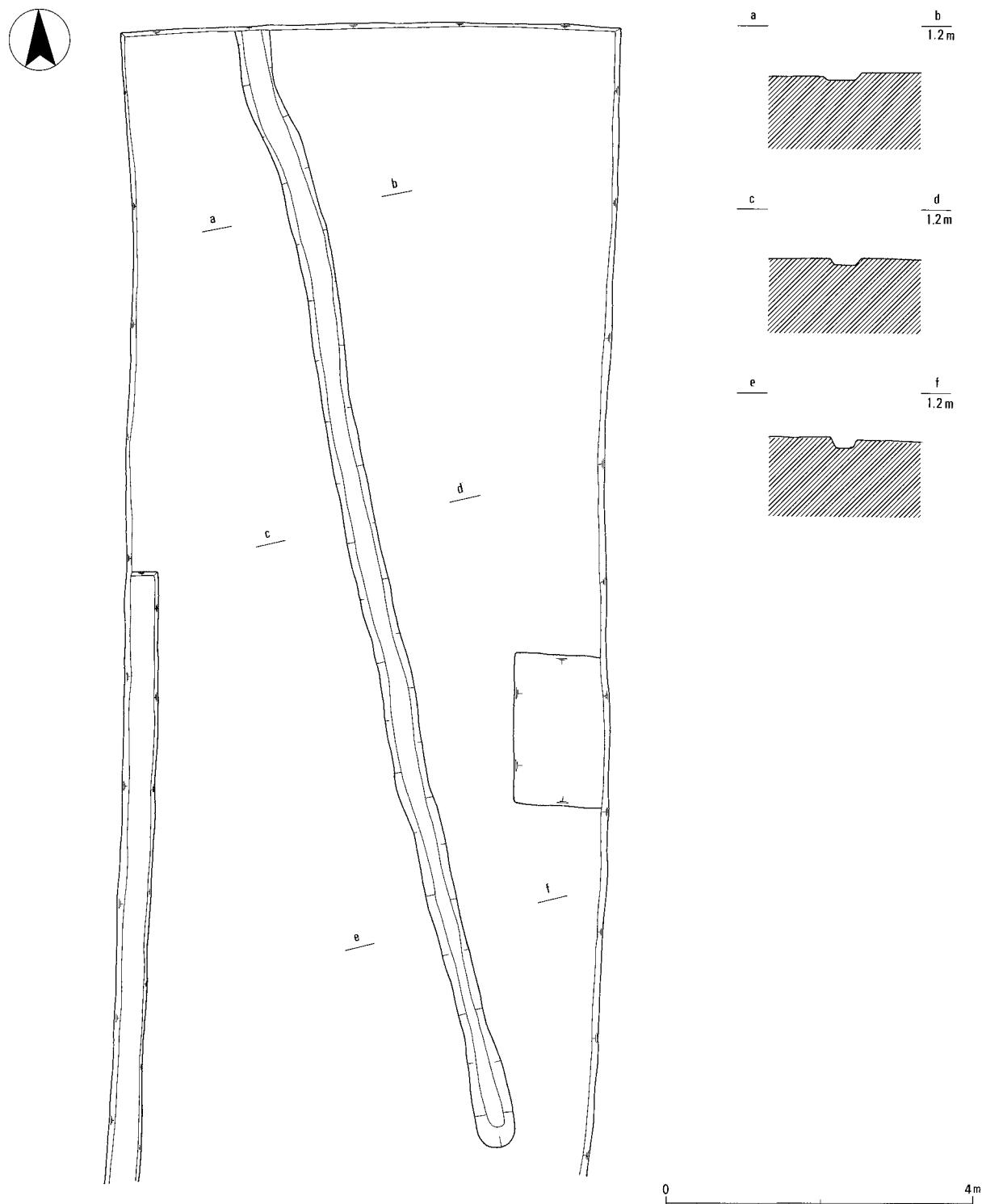
第5図 遺構平面図1 (1:300)



第6図 遺構平面図2 (1:300)

発掘調査区外の東西に延びていくようである。遺構埋土は、黒色シルトの1層で、その埋土からは土師器片が若干出土した。小片であるため時期の判断は難しいが概ね中世以降のものと考えられる。何らか

の区画がなされていたのであろうか。また、SD 1とは方向が違っていて、これらの2条の溝は違う時期のものかもしれない。



第7図 SD 1 平面図・断面図 (1:80)

IV 遺 物

今回の調査で、コンテナボックス3箱程度の遺物が出土した。遺構出土の遺物については、小片であるため掲載していない。以下に、今回の調査で、便宜上遺物包含層出土とした遺物と前年度に行った範囲確認調査において出土した遺物を報告する。

包含層等出土遺物（1～16）

1は武人形あるいは甲冑形埴輪の小片と思われる。草摺の部分と考えられる。外面には、3条の横線とその間に矢羽根状の列が施されている文様が2段みられる。この文様帶状に赤色顔料が塗布されている。5世紀後半、古墳時代に属するものと思われる。2は蓋形埴輪の小片と思われる。突帯が横位に施されている。5世紀後半、古墳時代後期に属するものと思われる。3は朝顔形埴輪の小片と思われる。突帯の一部が残存している。5世紀後半、古墳時代に属するものと思われる。4は家形埴輪の一部であろうか。縦位のハケメが施されていて、赤色顔料の塗布が確認できる。5世紀後半、古墳時代に属するものであろうか。5は何らかの形象埴輪の小片であると考えられる。概ね5世紀後半、古墳時代に属するものであろうか。6～9は円筒埴輪の底部と考えられる。埴輪表面の風化もあり調整が明瞭ではない。縦位のハケメが施されているようである。概ね5世紀後半、古墳時代に属するものであろうか。10は古式土師器の壺口縁部であろうか。概ね5世紀後半、古墳時代に属するものであろうか。11・12は土師器皿

である。薄手の器壁で、口縁部がやや内弯気味に立ち上がるるものである。これらは概ね15世紀代、室町時代に属するものと考えられる。13は陶器、通称山皿の底部片である。14は陶器碗、通称山茶碗の底部片である。高台が若干残る。これらは、藤澤編年5型式に相当しよう^①。概ね13世紀代のものと思われる。15は土師器鍋の口縁部片である。口縁端部が内側に折り返されている南伊勢系土師器である。伊藤編年第4段階に相当しよう^②。概ね15世紀代、室町時代に属するものと考えられる。16は土師器羽釜の体部片である。南伊勢系土師器である。伊藤編年第4段階に相当しよう。概ね15世紀代、室町時代に属するものと考えられる。

範囲確認調査出土遺物（17・18）

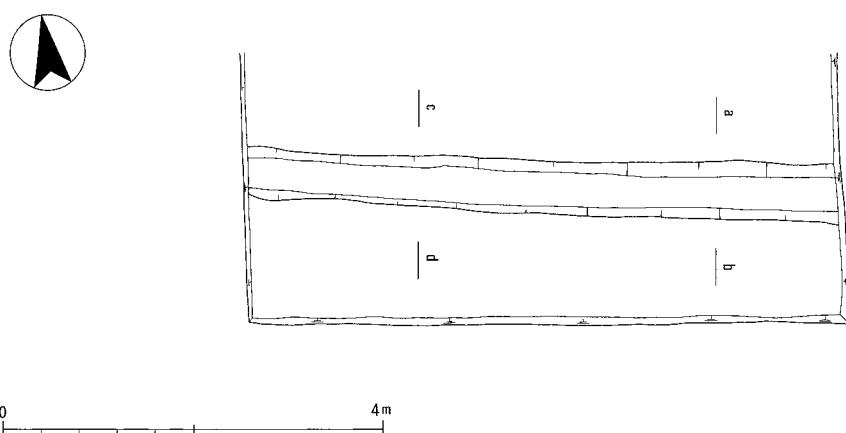
17は土師器杯の口縁部片である。奈良時代、概ね8世紀代のものか。18は土師器茶釜の口縁部片である。南伊勢系土師器である。伊藤編年第4段階に相当しよう。概ね16世紀代、室町時代に属するものと考えられる。

〔註〕

①藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994年）。に拠る。

②伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history』vol.1、三重歴史文化研究会、1990年）。

伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム、1996年）。に拠る。



第8図 SD 2 平面図・断面図 (1:80)

V 小 結

大見遺跡の発掘調査からえることができた、遺構及び遺物の情報を概観し小結としたい。

1 遺構の成果

残念ながら、発掘調査区に隣接する糠塚や丸山古墳に関連する遺構、例えば周溝等や別の古墳を確認することができなかった。土層の堆積状況からも河川の氾濫が度々あった可能性が推定できよう。そのような河川が隣接する地に、丸山古墳等は築造されている。古墳築造時には海岸線も現在よりも内陸側に存在していたであろうから、河川等の影響受けない安定した土地を選択し築造したのだろう。ここで、大見遺跡に目を転じれば、古墳に隣接することや遺構が少ないことを勘案すれば、古墳の祭祀にかかわる空間として利用されていた可能性も否定はできないだろう。

2 遺物の成果

遺物については、数量的には多くないものの、形象埴輪、円筒埴輪、土師器類、陶器類の出土を確認することができた。特に、形象埴輪については破片

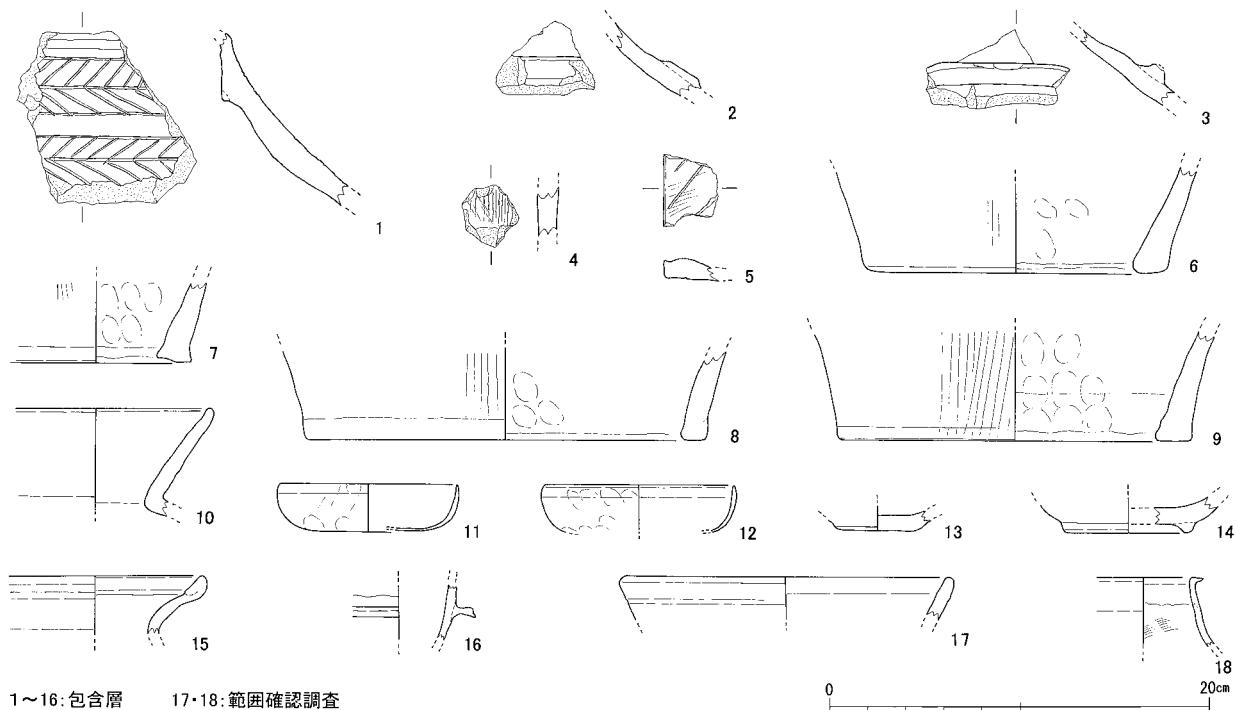
ではあるが、甲冑形（武人形）・朝顔形・蓋形・家形等の埴輪確認できた。隣接する糠塚古墳等のものであるかどうかは判断に苦しむところである。しかしながら、先に述べた埴輪群を供した古墳が大見遺跡の周辺に存在したことは否定できないだろう。

3まとめにかえて

先にも述べたように、佐久米古墳群は沖積低地に展開し、地形的に安定した部分に築造されたと思われる。また、大見遺跡出土の形象埴輪群をみても、古墳を築造できる程の人々が、古墳時代には大見遺跡の周辺に存在していたと思われる。遺跡や周辺の地形が、海に近い河口部であるという特徴があり、当時は周辺に「津」が形成されていた可能性が指摘できよう。想像をたくましくすれば、その「津」を経済基盤とする支配階級の存在が想定できる。また、その人々が古墳の築造に関わったのかもしれない。

以上のように、発掘調査の成果から、地域の歴史の一端を明らかにすることはできたのではないだろうか。

（小瀬 学）



第9図 出土遺物実測図 (1:4)

写 真 図 版

写真図版 1



米軍撮影の航空写真

写真図版 2



調査前風景（南から） ※右：丸山古墳、左：糠塚古墳



調査前風景（北から） ※左：丸山古墳

写真図版 3



調査区遠景（北から） ※左：丸山古墳、右：糠塚古墳



調査区全景（上から）

写真図版4



調査区全景（北から） ※左：丸山古墳



調査区全景（南から） ※右：丸山古墳

写真図版5



調査区南側（北から）



調査区北側（南から）

写真図版 6

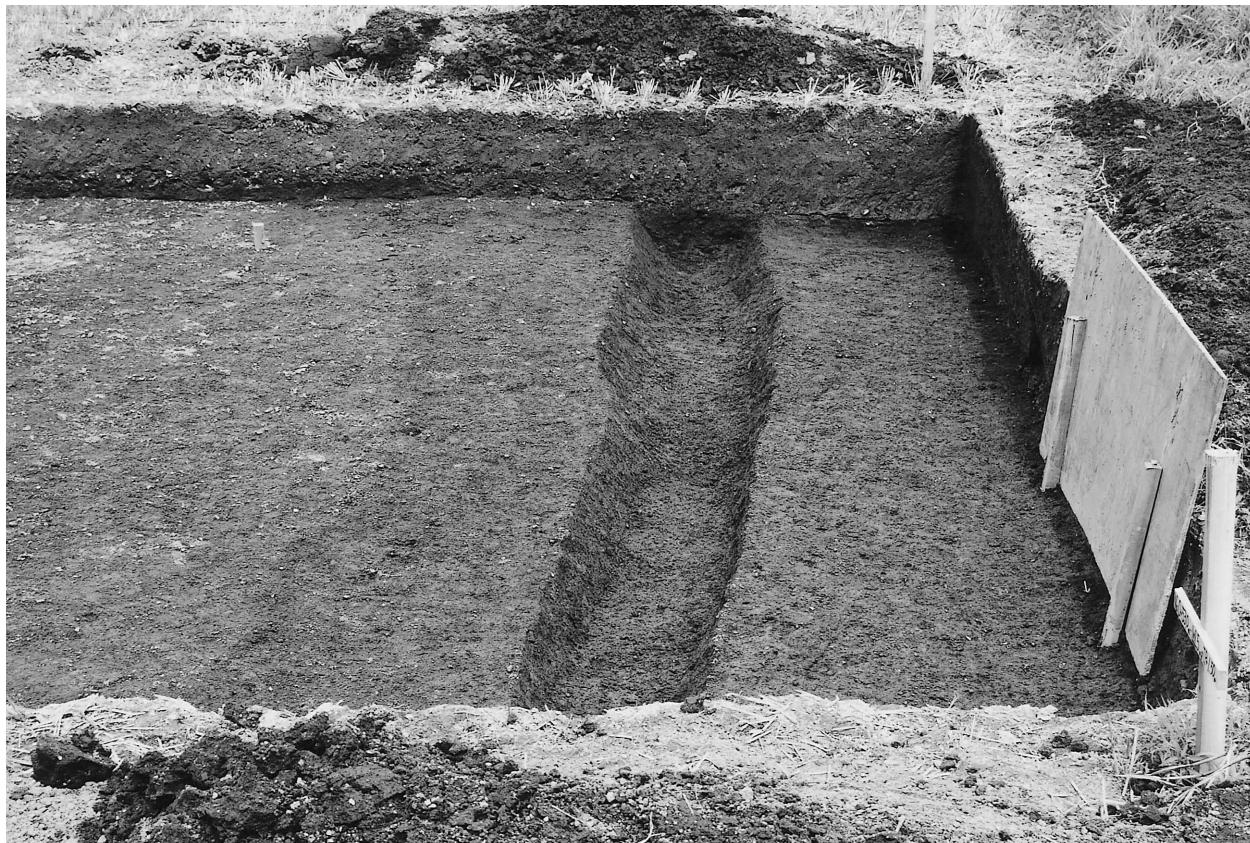


SD 1 (北から)



SD 1 (西から)

写真図版 7



SD 2 (西から)



SD 2 (南東から)

写真図版 8



土層の状況（東から）



調査風景（西から） ※奥は、丸山古墳

写真図版9

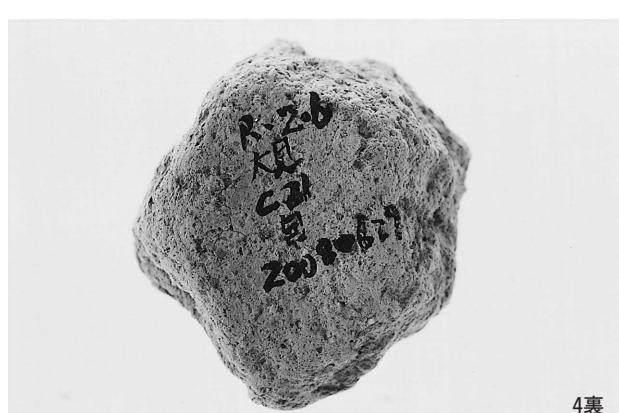
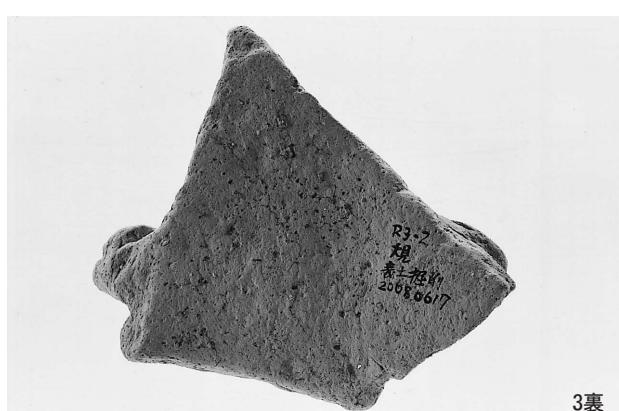
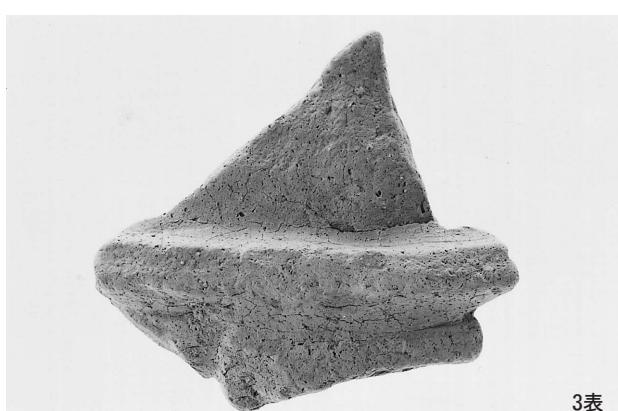


調査風景（南から） ※左奥、糠塚古墳



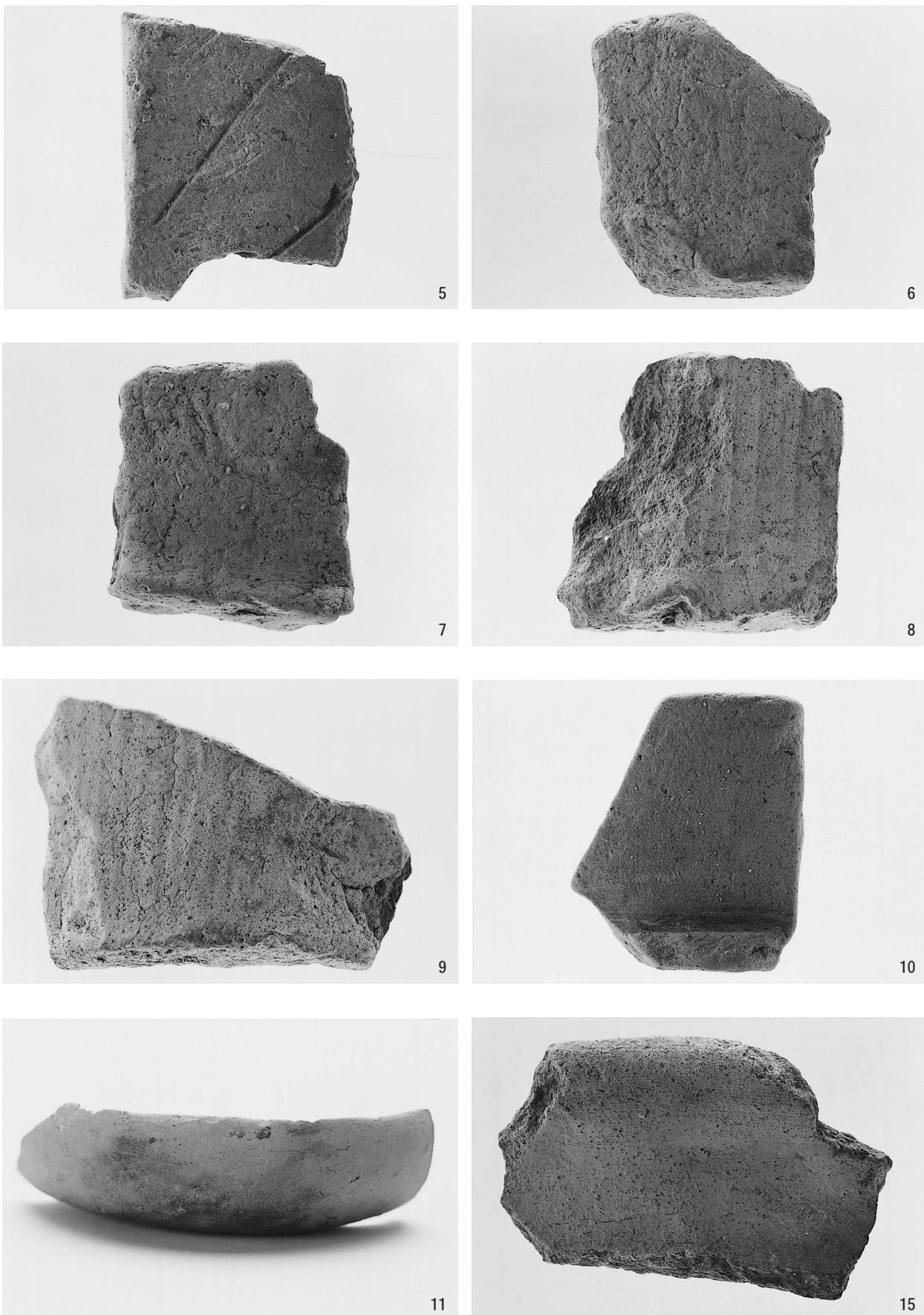
発掘調査地の現状（南から）

写真図版10



出土遺物 1

写真図版11



出土遺物 2

報 告 書 抄 錄

三重県埋蔵文化財調査報告304

大見遺跡発掘調査報告

平成21（2009）年1月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 光出版印刷株式会社